

父亡き後、母に守られて

愛知県 夏目幾世

未知の満州へ運命の入植

昭和十六（一九四一）年、そのころの私は三河の山村で、祖母に父母それに兄弟五人の一家八人の家族の一員として、平和で楽しい日々を送っておりました。

私は末から二番目の次女でしたので、大東亜戦争が始まって、何故父が満州開拓団員として入植しなければならなかったのか、幼かった私には知る由もありませんでした。それも家屋敷、田畑までも売却しての移住ですので、母の実家では大反対で子供を皆連れてでも帰って来いと言われるし、また親類の人たちからも猛烈な反対に遭いながらもなお、とどまらない決断であつたようです。幸い十八歳の姉は嫁ぐことになつておりましたし、長兄は寄宿で高校に入る手はずであり、小学校四年生の次兄は、埼玉のお寺で大学まで面

倒を見ていただく約束でありましたので、結局渡満は祖母と父母、それに末の妹と私の計五人で出発することとなり、昭和十七年、生まれ故郷の三河を後にしたのです。目的地の、広漠たる満州原野の最果ての地といわれる黒龍江省甘南県東三河開拓団に入りました。

現地での生活

父は入植早々から総本部勤めで、用地買収等の仕事をやっていたようで、遠方まで足を延ばしているのかほとんど家にはおらず、帰宅するのは月に一度くらいでした。そのころの生活を振り返ると、七十過ぎの祖母はもっぱら私と妹の面倒を任されているので、農耕には母が出掛けていたようです。広大な農地を耕すには一人ではとても無理なので、メンバーは班の人たちと中国人の苦力クワリの共同作業であつたのです。

小学校へ入学するまでは祖母と妹との三人で留守を守り、広大な耕地で働いている母の帰りを、今か今かと鶴首して待っていたものでした。夏は西瓜、カボチャ、ネギ、胡瓜、トマト、ナス、大根など色々な野菜が豊富にとれ、日本と変わらない収穫でした。

九月も半ばが過ぎると木枯らしが吹くようになり、十月に入ると朝夕には薄氷が張り出し、中旬以降からはもう寒い冬將軍の到来を知らせてくれます。厳寒の冬は氷点下二十度から三十度となつて、外に出ると針のような風が容赦なく肌を刺し、息をする蒸気で目も鼻も口も一面真っ白な雪ごおりで覆われてしまい、顔の見分けもつかなくなつてしまうほどです。そのころになると「オンドル」の燃料にするために、家の中は大豆の殻や乾草が山積みになっていました。そしてそれを適宜燃やしながらか、暖かくなつた部屋の中で祖母と私たちは、トウモロコシの実をもみほぐす仕事に追われ大変でした。たしか、夜になると狼の遠吠えが悲しげに、そして気味悪く聞こえたり、家畜の豚が泣きわめいて引きずられて行くのを見たりして、怖くて震えていたことを思い出します。祖母は常々、「悪いことをすると狼が連れに来るぞ」と言つて戒めてくれたのを思い出します。

入植二年を過ぎたころでしたか、予期せぬ大水害の発生で、丹精込めて生育していた作物のすべてが流さ

れて収穫皆無という悲惨な状況となり、身も心も苦しく脱落する者も出てくるという悲しい年がありました。村全員の会議で、最悪の事態を招いたことへの責任のなすりあいなのか、父は丸太でたたかれ右腕を負傷して帰宅したことがありました。病院にも行かず、「お国のために頑張るのみ」と腫れた右腕を抱えて我慢していた姿が、今も目に浮かんでくるのです。

魔の終戦

昭和二十年になつて日本の戦況は利非ず、日毎に悪化という情報が飛び交う中、男子には若い人から召集令状がきていたようですが、八月に入つて運命の赤紙は、いよいよ父にもきてしまいました。父はその夜遅く、ランプの薄暗い明かりの下で、「サラシ」の白布に朱の手形を押し、文言を書き添えた「遺言状」を母に託して出征して行きました。

そんな慌ただしい状況のもとで八月十五日を迎えてしまいました。終戦の報がいつどうして届いたのかは全く記憶にありませんが、そのころから開拓団の人たちは、私たちの家に寄り合つてはいろいろと相談をし

取り決めをするようになったようです。夜昼を問わず男の人が二人一組となって、二時間おきに各家を巡回していたようですが、ある時、警備の人が鉄砲を留守宅の玄関に置いて家の中に入ったところ、満人がその隙を狙っていたのでしよう、大切な鉄砲を二丁盗まれてしまったそうです。

第一の犠牲者

忘れもしない八月二十五日のことでした。この日初めて匪賊の襲撃に遭い、双方撃ち合いとなったようです。このときはまだ団に武器がありましたので、団員は銃を撃ちまくることができ、このため相手方にかかりの負傷者が出て幸いにも逃げて行ったそうです。私たち女・子供はただ、地面に身を伏せて静かになるまでじっとしていましたが、震えは止まりませんでした。

父はこの日に、チチハル市で兵役を現地解除されたといえます。そして、団のことや家族のことが心配だったのでしよう、取る物も取りあえず駆けつけた一心で、単身、馬に乗って家路を急いでいたように

す。

次の朝、父が親しくしていた満人が知らせてくれました。父は家のそば、わずか二百メートルの所までできて、匪賊の負傷者に捕まり殺されていました。刃物で滅多突きで左半身十八カ所も刺されたうえ、裸にされて捨てられていたのです。遺体には申し訳程度の土がかけてあったそうです。

団の人の配慮だったのでしよう、私たちの見た父は、頭から包帯が巻かれ着物も着せてあり、そのうえに、形ばかりでしたが葬式もしていただくことができ、ました。葬式の場で妹が、何も分からずに歩き回り、かわいい仕草をするので、団の皆さんの涙を誘っていたことを忘れることができません。

団員の方々が辛い墓を掘ってくださったので、父には生前愛用していた着物をたくさん着せて埋葬したのですが、次の日には掘り返されて丸裸にされ、衣類は持ち去られていたと聞き及んでいます。

無惨な父の死に様を見て団の中は騒然となり、異様な雰囲気の中で父の葬儀が行われたようです。埋葬が

済むや否や殺気立った人たちが十数人があだ討ちに行く
といて、団長の制止するのも聞かず振り切つて飛び
出して行き、また一人の犠牲者を出すやら散々な目に
遭つて戻つてきたのです。

開拓団占拠

このことがあつてから、匪賊の襲来は連日続くよう
になり、団長は危険を察知して持つてゐる武器のすべ
てを供出し、敵意の無いことを伝え投降したのです。

厳しい監視の中での数日後、団の全員が広場に集結
させられ、その場で十八歳から六十歳までの男は後ろ
手に縛られ、荷車に乗せられていづれかへ連れ去られ
て行きました。

残つた人たちは、急に男手を取られてただ茫然とす
るばかり。何をするにもうまくいかず支障が続出、何
とか戻してもらう方法はないかと相談した結果、お金
で解決することに衆議一決、みんなで幾ばくかのお金
を出し合つて相手方に渡し交渉したところ、団長さん
を除いて一週間ぐらいで返してくれました。しかし団
長さんだけは一カ月以上も返してはくれませんでしたし

た。そしてやつと返されたときの団長さんの姿は、と
ても惨めでこれが本人なのかと見まごうほどの変わり
果てようでした。「どんなにひどい仕打ちをされても、
みんなのことを思つて耐え忍び、頑張つたよ」。そう
言いながら裸になつて見せてくれた体は全身みみずば
れでした。しかもなおよく見ると、あちこちにやけど
の跡があつて、それが化膿してただれ大きな口をあけ
ていました。

団長さんは監禁されてからずっと、毎日裸で吊るし
上げられ、深く投降しなかつた責任を問われていたそ
うです。あるときは竹でたたかれ、あるときは焼け火
箸でせっかんされたと聞き、そのひどい仕打ちにみん
な泣きました。

身体検査

団長さんが返されてすぐ団員全員が一カ所に集めら
れ座らされました。もう武器のない私たちは、彼らの
言うがままでした。彼らは私たちの周りを二メートル
置きぐらゐにそれぞれ銃を持つて立ち、銃口を突き付
けるのです。私はそれらの銃口からいつ火が噴き出す

のか、それを思うと恐怖で体がすくみ、胸の鼓動は早鐘のように打ち出しました。そしてただ、祈る気持ちで彼らの動きをじっと見据えていました。赤ちゃんを抱えた母親は誠に気の毒でした。泣き叫ぶ赤ちゃんをあやそうと立ち上がると、「殺すぞ」と言つて銃で小突くのでした。

しばらくして列が動き始めると、真っ暗で倉庫みたいな建物の中に、私たちは詰め込まれました。目が慣れてくると、仕切りのある部屋があつてそこに小さな出入り口を設け一人ずつ中に入って身体検査を受けているのが見えました。中はローソクの明かりだけだったので薄気味悪く、早く外に出たい衝動に駆られるのでした。ある人は胴巻きに入れてあるお金や小物を取られ、また、ある人は口まで開けられて何か隠してないか調べられる始末です。裸にされた人もいたそうです。後ろの方にいた母は、仕切りに積んであつた土のうに胴巻きを素早くねじ込んで検査を受け、後で見つからないようにして取り出し難を逃れました。このときの母の臨機応変な行動と手際の良さには、ただただ

感服、すごいの一語でした。しかし、母のつたこの行動は、父を失つた悔しさと自分が家族を守らねばという責任感がさせたのだと思つて、今でも感謝しております。

飢えと屈辱の生活

このような悲運な状況下で月日だけは過酷に過ぎて行き、生きるためには何としてでも食ふなくてはなりません。いつしか食糧も衣類もだんだん乏しくなり、心細い思いは募るばかり、そんなときに今度は、ソ連兵が戦車に乗ってやってきました。「今度は全員殺されるぞ」との情報が入り、もう生きた心地はせず、ただひたすら無事を神様にお願ひするばかりでした。

その日の朝突然、ごう音と地響きで目を覚まし、外をのぞいてすっかり仰天してしまいました。戦車とトラックの部隊を先頭に大部隊が侵入してきました。トラックの後から馬に乗った兵隊が、銃を乱射し叫び声をあげながら押し寄せてきたのです。家の前を歩いてきた男の人が撃たれて倒れました。兵隊は各家に土足で押し入り、時計や貴金属などのめぼしいものは

片っ端から強奪し、そこに女の人を見つけると、容赦なく抱きついて乱暴していました。

匪賊やソ連兵、それに現地人も加わっての度重なる侵入で、若い女の子たちは、髪を切り男装をしてそのうえ顔に「すみ」まで塗っての生活でした。現地人の襲撃も目を追うごとに激しさを増して、家の中から次々と物が無くなってしまい、最後には「たらい」に漬けてある「オムツ」までも持って行かれる始末でした。現地人もだんだん悪らつになり、最後にはお金をどこかに隠しているだろうといつては、長い鉄棒を持ってきて地面を突き刺して歩くという、誠に情けない状態となっていたのです。

東陽鎮へ移動

引揚げ準備のためには東陽鎮の村の方がいいとの団長の計らいで、ここから二十キロメートルもある開拓団の村へ移動することになりました。移動にはどうしても荷車がいりません、知り合いの現地の人にお金でお願いして送ってもらいました。東陽鎮の村の人たちは先に引き揚げて空き屋になっていましたが、田圃には

まだ稲が残っていたので、皆大喜びでした。

しかし、農機具は一切無かったのでみんなで稲穂を手で摘むことになりました。摘んできた稲穂を手ですごいて、それぞれのビンに入れ棒で突いて玄米にし、それを持ち寄って雑炊にして食べました。大きなハンリ（大鍋）で煮た雑炊も、大勢の人で食べるので少しづつしかあたららず、いつもひもじい思いでいたことを思い出します。

父亡き後、七十五歳の祖母を抱え、そのうえに幼い私たち二人を食べさせていかななくてはならない母の苦労は、大変だったろうと思います。

東陽鎮の村へきてからも匪賊の襲来は何度もありました。ある時、満人がずかずかと入ってきて、家捜しを始めるのです。そのころはもう荷物は毛布にくるんだ僅かな物しか無く、満人は「品物はこれだけか」と母を小突くのです。母はこれだけは取られないようにという物を、オンドルの穴に押し込み隠していたのですが、「これだけしか無い」の一点張り、満人は、それでも何か隠しているのではないかと疑い、鉄砲の

柄で頭をいやというほど殴られて気絶してしまったこともありました。

また、祖母は取られまいとして、着物を着れるだけ着て、見るからに厚着をしていましたので、一枚脱げと言われたときもありましたが、母は、病弱な年寄りだから許してと必死に頼んで難を逃れたこともありました。

現地人の中には、母に子供を連れていてもよいから嫁にきてくれと、何度も言い寄る人もいたそうですが、私は郷里に三人の子供を残してきたのだから日本に帰らなくてはならないのだと、はっきり断り続けたそうです。そんな状況の中、父がかわいがっていた満人が見るに見兼ねてか、私たち親子を引き取って小さな家にかくまってくれました。

そんなころ、元気のいい人たちは二百キロメートルもあるというチチハルまで引き揚げて行かれたようでした。

私の見た夢

ある開拓団では、足手まといになる八歳以下の子供

を焼き殺して、大人と大きい子供だけで引き揚げたところがあると聞いて、とても恐ろしく身の毛がよだちました。当時八歳だった私には他人ごとではなかったでしょう。ちょうどそのころ、優しかった祖母が亡くなったのです。土葬はできないので野草を積んで火葬にされました。「お祖母ちゃん熱かろうなあ」と心に焼き付いて離れません。

それからは、いつも子供が並んで焼かれるのを待っている、「怖いよう、嫌だ、嫌だ」と言いながら自分が焼かれて骨になるまでの夢を見るのです。同じような夢を何度も見るのです。

また、銃口がいつ火を噴くかとその穴を見つめて、そこから目が離せない夢や、父を迎えに行くといつてどんどん歩くのに、行けども行けども小高い丘が立ち塞がり、どうしても父に逢えない夢、また、追い掛けられて刃物で体を斬られる夢、背中といわず腹といわず、鎌のような物が私の体に突き刺さるのです。普通の人なら斬られる前に怖くてパッと目を覚ますと思うのですが、私の場合は、最後まで見続けてしまうので

す。

幼年期の精神的なショックが大きかったのでしょうか、神経的におかしいのではと気にもしましたが、これも十四歳ぐらいまでで、以降このような夢は見なくなりました。

最後の引揚船

昭和二十一年八月に入ると、残留者に「日本への引揚船はもう最後になるのではないか」と伝えられました。これに便乗しないともう日本へは帰れなくなるということでしたので、母は急いで身支度をし、六月に亡くなった祖母の遺髪と父の爪を小さな袋に入れ、母は「これだけはどんな事があっても持って帰らなくてはね」と、しっかり自分の体に巻き付けておりました。

お世話になった満人が馬車でラハの駅まで送ってくれました。

私と妹の幼子二人を連れての道中、この数日間はとも口では言い表せない苦勞の連続であったようです。八月の末に、やっとの思いでコロ島に着き、港で

待っていた日本の船に乗ることができたときは、母はもう精も根も疲れ果てたのか、その場に座り込んでしまいました。

体力の限界まで頑張ってきた母も、つい気弱になつて、「なあ、日本に帰ってもだれも生きてないかもしれないから、ここで一緒に死のうか」と船の甲板に連れて行かれ、飛び込もうとするのですが、私と妹で「死ぬのは嫌だ、死ぬのは嫌だ」と両手を引っ張りすがりつくものだから、やっとなきらめて船室に戻つたのです。次の日もやはり同じことをしましたが、もう私たちの力の方が強く、皆で泣きながら船室へ下りて死ぬのは思いとどまりました。

戸惑う母の郷里

佐世保の港に入つて、伝染病の検疫で足止めをされ、上陸が許されたのは昭和二十一年十月十八日、引揚げセンターでも十日以上泊まって、母の郷里の北設楽郡東栄町に着いたのは十一月に入ってからだったと思います。途中、豊橋駅を過ぎるころは夜になってしまい、ここが豊橋だと言われましたが、町にはわずか

な電灯しかついておらず、真っ暗闇の町でした。

母の郷里には小さな子供が七人もいて、母の兄も実母も亡くなっていました。私たちの突然の帰郷に戸惑いは隠しきれず、まさに招かざる客で本当に迷惑だっただと思います。

母と私たちは、すぐには家にあがれませんでした。戸外でかまどを仕立て、アカでまみれた着物を脱ぎ全部煮沸消毒をして、そこで体も洗ってからやっとあがることができました。

着いたその晩は伯父の所で泊まることになり、独り者の伯父が作ってくれたのが、大麦のお粥でした。お腹が空いていたので思わずいただきましたが、私と妹は、次の朝から突然ひどい下痢をおこしてしまいました。母は、「子供には白いお粥を」と言えなくて、私たちに我慢するようにと小声で知らせるのです。

翌日から母は実家での野良仕事に出て行きました。私たちも、下痢の続く体で里芋の皮むきなどをして働きました。母の父は存命でしたが実権は無く、ただ心配なのか、おろおろとするばかりで気の毒でした。

私たちの渡満を強く反対した人々の中に戻ってきたのですから、それ見たことかといわんばかりの態度に、母はまるで針のむしろに座らされている気持ちだったでしょう。親類への挨拶回りをしても、いい顔ひとつしてもらえない筈はありません。ある家では「なんだあんたか、何しにきたの、何か用事なの」と冷たくあしらわれ、借金でもしにきたのかと思われたのか、中には入れとも言われず、おまけにさげすんだ目で見られる扱いに、母は悲嘆の涙を禁じ得なかったのです。そして母は、もう二度とこの家にはこないし、親類からの借金は絶対にしてはならないと心に誓ったのでした。

居所転々

数日後にやっと長兄がきてくれました。その晩は兄と一つの布団に寝たのですが、微動だにしない大きな体の横では、いくら兄だと思っても怖くて朝まで眠れませんでした。

父が亡くなってからは、男の人は皆怖い人との印象が抜けなかったのです。

母の実家で二カ月ぐらいい世話になって、三都橋の父の姉の所に移りました。ここにきて伯父さんが、今は人手に渡っていた私たちの生家を借りて、祖母と父の葬儀をしてくれました。この生家は、私の祖父の妹の子が買って入ってくれておりました。あとで聞いたことですが、その伯母さんが、実家の家が人手に渡ったと聞いてとても悲しがり、我が娘に守ってもらおうと、父の売った倍の価格で買い戻してくれたそうです。少しばかり残して行った山林も守っていてくれました。ここも三カ月ぐらいで、今度は海老野町に移住し、長兄が私の勉強が遅れるのを心配して、自分たちの卒業した海老野小学校に入れてくれたのです。三年生の三学期を二カ月ぐらい通いました。

安住の家

長兄が、宮町の食糧管理講習所に勤めたのを機に、昭和二十三年三月に、四反五畝の土地を買って開墾、小さな家を建てて母と長兄、私と妹でささやかな生活が始まり、学校は四年生に編入、妹は一年生に入学しました。

満州の逃亡生活中の学業が空白のまま、結局私は小学校二年生の一学期から一足飛びに四年生になったようなもので、時計の見方も解らないほどに遅れてしまっていたのです。

こんなころに、健康優良児だった兄が、職場での過労と無理が重なり、そのうえに栄養失調から結核を患い寝込んでしまいました。

兄は私の二年の遅れを取り戻そうと、毎日学校の見学帰りに「今、何時だ」とか、掛け算も二の段から言わされたりして、間違うと正しく言えるまで家にあげてもらえませんでした。担任の先生にも心配されて特別をしていただいたりしましたが、それでもみんなに追いつくまで一学期かかりました。

そのころの学級には、東京や名古屋からの疎開の子が多かったように思います。今で言ういじめもありましたが、担任の先生の計らいで、ちょうど体操の時間でしたか、その時間を割いて一時間、私の家のことや満州のことをみんなに話してくれました。

それからは、あまりいじめられるようなことはなく

なりました。

長兄の死

こんなころに、次兄が埼玉の養子先から帰ってききました。四年制の高校を三年で帰ってきたのですが、あと一年残っていても、こちらもどんだ生活なので高校を続けることはできません。次兄も黙って就職しました。

昭和二十四年二月、長兄は結核で死亡しました。

あるときは兄として、またあるときは父の代わりのような存在であった兄が逝ってしまうなんて、とても悲しいものでした。それにも増して母の落胆ぶりは悲痛そのもの。心底頼りにしていたのでしよう、今でも胸が締めつけられる思いです。

兄の最期は、結核療養所で迎えたのですが、子供は感染するからと出入りは厳しく、面会にも行けませんでした。母は、小さな骨壺を抱いて帰ってきて「健康優良児だったあの子がこんなに小さくなっちゃって」といって泣き崩れていました。

平和を願って

父は、「夏目家も二十代のおれでおしまいか」と言っていたそうですが、本当にゼロからの出発で、母の必死の頑張りで私たち姉妹は残留孤児とならず、今こうしてこの日本で、曲がりなりにも人並みの生活をさせていたに感謝し、多くの皆様方にご迷惑をお掛けしたことや、お世話になったことを忘れず、今後は万分の一でもご恩返しのできる生活をしたいと心に念じております。

平成二年九月に日中友好の旗印のもとに旧満州を訪れ、彼の地で慰霊祭が催されたことは何よりの喜びでした。

そこで父がたどった足跡を訪ねて、当時の両親の苦勞をしのぶことができ、また異国で亡くなった同胞の魂へ、どうか安らかに眠りくださいと、心からお祈り申し上げて帰還してまいりました。

もう二度と、このような悲しく惨めな戦争が繰り返されることの無いよう、世界の平和を願うものです。